

1920年代のアメリカー大量消費社会を学ぶ

京都府立加悦谷高等学校 堀江嘉明

はじめに

第一次世界大戦後に債権国となったアメリカ合衆国は、未曾有の急成長をとげ「永遠の繁栄」を謳歌する大量消費社会を実現した。この「アメリカ式生活様式 (American way of life)」は現代の日本をはじめとする諸地域の生活にも様々な影響を与えている。帝国書院『明解世界史A 最新版』p.154～155「あこがれの生活 アメリカの大量消費社会」では「電気冷蔵庫の普及がアメリカ国民の食生活を大きく変えたのと同時に豊かな生活を象徴するものとして人々のあこがれの的となった」とある。

「歴史」の授業のなかで、上記単元は、単なる過去の事柄を学ぶのではなく、物質文明を享受している「今（現在）」に大きく繋がっている事柄を学ぶ単元の一つであろうと考える。

そこで1920年代のアメリカを『明解世界史A 最新版』（以下「世史A」と略記）と『最新世界史図説タペストリー 三訂版』（以下、「タペストリー」と略記）を活用しながらの授業案を示す。

1920年代と今日

まず、現在の高校生の生活に馴染みが深い語句<コココーラ、マクドナルド、ケンタッキーフライドチキン、ガソリンスタンド>を示し、いつ頃に、どこの国・地域で一般化したか発問する。

コココーラは1886年にジョージア州アトランタの一薬剤師が南米産ココアの葉とアフリカ産コーラの実を調合したもので二日酔いに効く良薬として販売され、瞬く間に全米を席卷した世界的飲料である。（「世史A」p.155③参照）

また、マクドナルドは1937年にマクドナルド兄弟がカリフォルニア州にドライブイン式のハンバ

ーガーショップを開店したものが1号店であり、セルフサービスなど徹底した合理化を図ったものであった。

1932年、後の「ケンタッキーフライドチキン」の創始者カーネル（大佐）・サンダースはレストランを経営し、圧力鍋を使った独自の鶏の調理法で人気を得たが、新しいハイウェイ建設のあおりで集客能力を失ったためフランチャイズ権を売却しなければならなくなり、全米各地に行脚し、チェーン店を増やしていった。

1907年にミズーリ州で誕生したガソリンスタンドは、初期の自動車が故障しがちであったため整備工場と兼業であるタイプが多く、自動車の普及に伴って全米に広がった。

これらファーストフード店が1920年代の自動車社会の実現なしには誕生しなかったことにふれ、現在の私たちの消費生活と対比させたい。

繁栄の20年代

続いて、「世史A」p.154の自動車王ヘンリー＝フォード（1863～1947）の項および「タペストリー」p.229⑩の車の販売台数のグラフを見せる。

フォードのベルトコンベアによる大量生産方式の導入により「1台のT型フォードを製造するには、はじめ14時間かかったが、ベルトコンベア方式で93分になり、さらには25年には、年間100万台も生産され、1台当たりわずか10分程度」となったことが、一般労働者の年収の「4分の1ないし5分の1」程度という「低価格」化をもたらし、分割払いのクレジット決算により所有世帯が劇的に増大したことを、「タペストリー」（p.229⑩）のグラフで確認させる。

また、モータリゼーションの発達により、道路沿いのドライブインや郊外の駐車場を設置した大

型ショッピングモールなどが建設されたことを理解させる。

さらにはゼネラルモーターズ社がライバルT型フォードの屋根が防水に難がある幌製である点を指摘し、高級感を演出した「シボレーK型」を売り出す戦略に出たこと、この開発競争が当時の新しいメディアであるラジオ放送などを媒介として**非価格競争を激化**させ、広告費の増大、モデルチェンジ熱の高まりをもたらしたことにもふれたい。

続いて、「タペストリー」(p.229⑧)の写真を見せ、20年代の「大量消費社会」の到来を象徴するものとして、電気冷蔵庫等の家電製品の普及があることにふれ、**便利で豊かな生活が女性のライフスタイルをどのように変えたか発問する。**

1929年には全米の家庭の7割に電気がひかれ、その約4分の1に洗濯機が普及していたことにふれながら、洗濯などの家事労働の軽減が家事労働以外の余暇の時間をもたらし、1920年に全米の女性は**参政権を獲得**していたが、政治参加に加えて、さらに社会進出までも容易にしていたことにふれる。とくに商業、運輸・サービス業、営業・事務などの分野の従事者が増大していることを「タペストリー」(p.228⑥)の産業構造の変化のグラフで確認する。

さらに「世史A」(p.155①)の「大衆社会のパノラマ」中の**ダンスに興じる女性の服装と頭髪について思うことを述べさせる。**

パーマをかけショートヘアで濃い口紅、肌を露出させながらジャズに合わせて踊るチャールストンダンスに興じる若い女性は、自由に羽をバタバタさせる雛鳥（「フラッパー（ばたばたのお転婆娘）」）にたとえられ、大胆な水着姿で肉体美や脚線美を競い合う「美人コンテスト」が開催されたのも20年代であったことにふれる。

それまでのモラルに縛られた禁欲を是とする価値観が一変し、未来への夢より**現在の享楽に熱中する時代**であった。1920年代のアメリカの「熱気」には、熱冷ましのアスピリンが不可欠であったかもしれないことを、当時の呼称が「**アスピリンエイジ**」であったことから把握させたい。



「明解世界史A 最新版」p.155「大衆社会のパノラマ」

また、ダンスホールでは黒人がピアノ演奏をしている点にも注目させたい。20世紀初頭にニューオーリンズに誕生したジャズが北部にも広がり、アメリカの代表的な音楽となった。第一次世界大戦で白人が従軍したため、かつての白人街ハーレム地区に黒人が流入し、黒人芸術家のメッカとなり、いわゆる「ハーレム・ルネサンス」を現出し、その文化は大西洋を横断し、疲弊していたヨーロッパに流入した。「褐色のエロティシズム」のジョセフィン=ベーカーがパリの社交界に進出したのはその好例である。

加えて、「世史A」(p.155①)の「大衆社会のパノラマ」に映画館が登場している点にもふれたい。1911年にはハリウッドで映画製作が始まり、第一次世界大戦後からヨーロッパ出身の多くの映画人や俳優を受け入れた。イギリスからアメリカに渡った喜劇王チャップリンは抜群の演技力で大衆を魅了し、映画産業の大衆化に貢献し、サイレント・ムービーからトーキーへと切り替わっていた。

「タペストリー」(p.229)の「Theme 航空機産業のパイオニア」の写真を参照し、1927年にミネソタ出身の寡黙な青年リンドバーグが大西洋横断単独無着陸飛行を行い、一夜にして国民的英雄となったこと、いわゆる**アメリカンドリーム**の体現者となったことにふれる。

大量消費・大量生産時代の渦中のアメリカの大衆は現状に満足せず、ラジオがもたらす**精神的な刺激やヒーローを求めていた**点は媒介がラジオであるか、テレビやインターネットであるかという点を除けば今日とまったく変わりはないことを理

解させたい。

国内に抱える矛盾

「世史A」p.155②の摩天楼「エンパイアステートビル」の偉容はまさにアメリカ式生活様式の象徴である。自由の女神像が立つリバティ島の近くにあるエリス島には移民局が置かれており、移民はその地で合衆国への忠誠を誓い、自由の女神像の眼下に入国した。

しかし、移民らは国内に抱えるさまざまな矛盾に直面したことを、東欧・南欧・アジア系移民に対する排他的な差別・敵意、マフィアの横行、左翼への弾圧などの具体的事象を示しながら理解させる。

「タペストリー」(p.228① B)の「禁酒法」の写真を見せる。1919年に禁酒法が制定された背景には、第一次世界大戦での反独感情の高まりとビール業者の多くがドイツ系移民であったことへの反発、道徳的な理想論などがあげられる。

しかし、この法は反対者も多く、ごく普通の市民が違法精神をかなぐり捨て、密造酒の密造・密輸入・密売に手を染めるようになった。ブーツを履いて脚の部分に密造酒の小瓶を隠したため、「ブーツレッギング(ブートレッグ)」が密造・密輸を意味する隠語となった。また、密造酒の売買の交渉を声をひそめて話すことから「speak easy」がもぐり酒場という隠語となった。いわゆる海賊盤レコードや海賊盤CDなどを「ブートレッグ」と呼称するのはこの故事に因んでいる。

密売が大きな収入をもたらしたため、ギャングやマフィアがその勢力を拡大して、映画「ゴッドファーザー」で名高いアル=カボネが密造酒販売、麻薬、賭博、売春、「聖バレンタインディの虐殺」に代表される敵対者の殺戮など悪事の限りを尽くした。

「タペストリー」(p.228③)の「K.K.K.の集会」の写真を見せる。いわゆるWASP至上主義を標榜した彼らはアメリカ生まれの白人プロテスタントこそが「生粋のアメリカ人」であると主張し、当時の会員は数百万を数えた。

黒人らに対する集団暴力事件の報告数の上位に

位置する州の「分布状況」(タペストリー p.228① A)が南北戦争時の南部諸州と一致することを視覚的に理解させたい。

また、南欧系移民に対する人種差別の事例としてはサッコ・ヴァンゼッティ事件があげられる。ボストン近郊の靴工場の殺人事件の容疑者として靴職人のサッコと行商人ヴァンゼッティが逮捕され、2人がアナキストであったことを理由に死刑判決が下り、ロマン=ロランらの抗議声明も空しく死刑が執行された。この事件は20年代アメリカの負の側面を物語るものであり、2人が名誉回復するのはマサチューセッツ州知事が誤りであったことを認めた1977年であった。

「タペストリー」(p.228⑦)のグラフ「不況にあえぐ農村」を参照し、フーヴァーが「永遠の繁栄」を叫んだその一方で、農村では第一次世界大戦中の過剰な設備投資などにより農産物価格が下落し、離農者が増大し「繁栄のなかの貧困」の状態に陥ったことを理解させ、後のニューヨーク証券取引所の株の大暴落に続くことを紹介し結びとする。

まとめ

1997年、京都で気候変動枠組条約第3回締約国会議(温暖化防止京都会議)が開催され、先進国に温室効果ガスの削減を義務づけた「京都議定書」が採択され、今年(2005年)ようやく発効した。しかし、世界最大の温室効果ガスの排出国であるアメリカが、2005年3月現在、上記議定書から離脱していることも周知の事実であり、環境問題解決に向けた多くの課題を残している。

1920年代のアメリカの大量消費社会、「アメリカ式生活様式(American way of life)」の延長線上に現在の(京都議定書から離脱している)アメリカがあることを考えさせ、まさに歴史は過去の遺物ではなく、現在と未来を考察する学問であることを理解させたい。

《参考文献》

木村靖二／柴 宣弘『世界の歴史26』中央公論社
猿谷要『物語アメリカの歴史』中公新書